ベラルーシ断想

木　畑　和　子

第１章　ウクライナ戦争とベラルーシ

ウクライナ戦争のなかでベラルーシという国についてしばしば耳にするようになった。現在のベラルーシはロシアと密接な同盟関係を結び、ウクライナ侵略に大いなる役割を果たした大統領アレクサンドル・ルカシェンコの苛酷な独裁政権のもとにある国家として知られている。市民の民主化運動に対する弾圧が行われ、平和裏に行われるデモに対してでさえときに軍隊が出動し、武力弾圧が行われる。またデモの現場で逮捕されずとも監視カメラで参加者がチェックされ、子供じみた「仕返し」とかいいようのない処罰がなされる。こうした状況については密告・監視・逮捕・投獄・刑務所内での拷問を前にして亡命した人たちからの情報が伝えられるだけである。ジャーナリストによる自由な取材は許されていないのである。

この２年近く、ウクライナ戦争をめぐる報道で毎日のように、ウクライナの地にロシアのドローンやミサイルが飛び、ミサイルの爆撃により住宅が破壊され、市民が殺傷されるという様相が伝えられてきている。戦争が長期化する中、ベラルーシ自体もより直接的にそれに参加する可能性まで語られるようになってきた。

こうしたベラルーシであるが、ウクライナ戦争までは、この国について聞くことはまずなかったし、今でもこの国の歴史についてはほとんど知られていないといってよい。そのベラルーシに私は 2004 年に旅行した。本稿ではその時の旅行体験を参照しつつ、ベラルーシの歴史、とりわけ第二次世界大戦期の歴史を描いてみたい。

ただし、ベラルーシ語はもとよりロシア語ができない筆者にとって手に入る情報・史資料は少なく、限られている。そのなかで、筆者が重要と思うベ

図①　ベラルーシ地図

出典）服部他（編）『ベラルーシを知るための 50 章』、11 頁。

ラルーシの歴史的立ち位置を記すことにする。

第 2 章　ベラルーシ旅行

ベラルーシを旅行したのは、今から 20 年前成城大学から 1 年間の海外研修の機会をいただいた時である。研修先のベルリン工科大学反セム主義研究所

では、客員研究員として研究室が与えられるなど、環境には非常に恵まれ、そこで得たさまざまな知見はその後の研究や翻訳の基礎となった。

この研究所の情報で、旧東ベルリンにあるカールスホルスト戦争博物館共催の「ドイツの侵略・絶滅戦争の歴史を学ぶ」というベラルーシへの「学習旅行」のことを知り、6 月に 10 日間のベラルーシ旅行に参加した。ドイツ人の場合この旅行参加は有給休暇の対象となっており、また参加費用の一部補助もあるということだった。ドイツの「過去の克服」にかかわる国民教育の試みの一つともいえよう。

私がこの旅行に参加したのは、第二次世界大戦中、ナチス・ドイツの侵略によって最大の犠牲者を出したベラルーシで、個人では行くのが難しい戦争にまつわる場所に行くことができること、このような学習旅行がドイツではいかに行われているかその一端に触れることができ、またこの旅行に参加するような問題関心をもつ一般のドイツ人と話せることに、魅力を感じたからであった。さらに旧ソ連共和国の色彩を強く残す、ルカシェンコ独裁体制下の社会を垣間見ることができる機会かもしれないと、思ったからである。旅行プログラムには、ユダヤ人の大量虐殺地跡の訪問や、第二次世界大戦の戦争記念碑の見学、抵抗運動展示室などの見学、強制連行の生存者、元パルチザン闘士の話を聞くことが組まれていた。

この旅行は戦争博物館共催となっていたが、実質的には大学でロシア語を学んだ東欧史家のイングリッド・ダメロー夫人というフリーランスで通訳・翻訳をしている一個人によって組織されていた。彼女は、ボランティアとして、毎年 20 人程度のドイツ人を引率して、この学習旅行を実行している[(1)]。彼女は、ドイツのキリスト教団体が行っていた、加害者としてのドイツと東欧諸国の犠牲者たちとの「和解の旅」の参加者の一人であったが、その企画

が終了することになったため、個人で引き継いだという。その尽力には頭がさがる思いだった。旅行の運営は非常に実際的で、また人間としてもとても魅力的な女性だった。

私としては、旅行に参加はしたものの、勉強不足のため見聞きした事項や地名も頭に入らず、せっかくの貴重な機会を十分消化し切れなかったことを、大変残念に思っていた。それからずいぶん時がたったが、この機会に、旅行のことを振り返ってみた。

第３章　ベラルーシ史概観

【ロシア、ウクライナとベラルーシ】

まず近代から今日までのベラルーシの歴史や文化の概要を示しておきたい。そこで最も問題となるのは、ロシアとの関係である。

2023 年の秋の新学期にロシアで配られたという『新しい歴史教科書』（17 から 18 歳用）には、「三位一体のロシア民族」の図像が掲載されていた（図②）。

この図像はロシア人とウクライナ人はベラルーシ人とともに東スラヴ人として歴史的に共通の一体性をもつというプーチンの見解をあらためて教育で強く打ち出そうとしている徴として、話題になった(2)。

この「三位一体」の考え方は 19 世紀後半の帝国主義時代に強まってきた考え方であるという。そもそもベラルーシという国民意識形成が芽生えるようになったこと自体、すぐ後で述べるように 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけてである。古来ベラルーシはロシアとポーランドにより交互に支配されており、近代になってようやくベラルーシなるものがおぼろげにその姿を現し

図② 「三位一体のロシア民族」図像
出典）wikimedia（パブリック・ドメイン）。

たと捉えることができる[3]。

「三位一体」の今一つの構成要素であるウクライナと比較してみると、両国ともロシアの強い影響を受けてきたという歴史を共有し、また地続きであることもあり、自然もよく似ている。ただし政治的には、親露、親欧と結びついた東西対立が政治の基軸となったウクライナ（東部は貧しく共産党の票田となる。西部はヨーロッパとの結びつきがある）のような状況は、ベラルーシではみられず、親露的性格が強い。

【民族構成と宗教】

ベラルーシは多民族国家である。ベラルーシ人の他、ロシア人、ウクライナ人などが居住し、さらに本稿で重視するユダヤ人もいる。1897 年の国勢調査では、ユダヤ人人口は約 91 万人で、ベラルーシの人口の約 14 パーセントを占めていた。しかしその後、後述のようにユダヤ人は海外移民やナチ・ドイツによる大量殺害で減少した。1999 年でユダヤ人人口はベラルーシ全体ではおよそ 3 万人で総人口の 0.3％となっている。首都ミンスクの場合 2015 年には、人口 194 万人のうち、ベラルーシ人 79.3％、ロシア人 10％、ウクライナ人 1.5％、ポーランド人 0.7％、ユダヤ人 0.3％という比率である。

ベラルーシの宗教はロシア正教とカトリックからなる。2014 年のアンケート調査によれば、自らの帰属を正教とするものが 84.0％、カトリックが 8.5％、その他が 2.0％である。概して、正教とカトリックは平和的に共存している[(4)]。

【近代史】

18 世紀末以降、第一次世界大戦期までのベラルーシの歴史をごく簡単に記してみると以下のようになる。

1795 年、第三次ポーランド分割により、現ベラルーシ全域は帝政ロシアの支配下におかれた。1812 年、ベラルーシはナポレオンのモスクワ遠征（祖国戦争）の通過地点であった。同年冬、雪と氷の中を敗走するフランス軍はほとんど全滅したが、その場所もベラルーシ（ベレジナ渡河）であった。

19 世紀のベラルーシ地域はカトリックのポーランドと正教のロシアとの勢力争いの場となり、その中で徐々に両者と異なるベラルーシという独自のまとまりを持つ民族が形成されてきた。1864 年、ロシア支配に対するカス

トゥーシェ・カリノフスキの蜂起が失敗した後、貴族は弾圧されたが、ロシア政府は農民の支持を得るため、土地付きの農奴解放令を出した。

1914 年、第一次世界大戦開始によりベラルーシ西部地域はドイツ軍によって占領された。ロシアで 17 年 11 月の社会主義革命によりソヴィエト権力が樹立されたのと連動して、ベラルーシの中・東部でもソヴィエト権力が樹立された。18 年 3 月、革命ロシアとドイツは和平条約をベラルーシ西部地域のブレスト・リトフスク（現ブレスト）で結んだ（ブレスト・リトフスク条約）。その後ドイツの敗北を経て、ボリシェヴィキは 1919 年 1 月「白ロシア・ソヴィエト社会主義共和国」（以下ベラルーシ共和国）の建国を宣言した。

【戦間期】

第一次世界大戦後のポーランド・ソヴィエト戦争により、ベラルーシは西部地域（ポーランド共和国）と東部地域（ロシア共和国とベラルーシ共和国）に分割された。新国家は人口およそ 800 万人の多民族国家であり、ベラルーシ人が多数を占め、ポーランド人、ユダヤ人、ロシア人の居住地が散在した。広大な森と沼に囲まれ主に農民が居住する素朴な地方と首都ミンスクやグロドノ、ピンスクなどユダヤ的色彩の強い都市とがはっきりとした対照をなしていた。

1920 年代、ロシア共和国に移管されていた東部領土はベラルーシ共和国にもどされたが、スターリンによる全体主義的なソ連国家体制が確立されるのに伴い、ベラルーシ共和国でも農業集団化が行われ、住民に対するテロ支配が始まった。この時期、「民族主義的偏向」、「人民の敵」などの汚名を着せられ弾圧された市民は 60 万～100 万人にも及んだと推定されている。ミンスク近くのクロパティの集団墓地群には数十万人ものスターリンのテロによる犠

牲者が埋葬されていると考えられている[5]。

なお1930年代のウクライナの大飢饉「ホロドモル」とは「ウクライナ人を標的としたジェノサイド」としてウクライナのユシチェンコ政権期に喧伝されてきたが、ベラルーシ人も、ロシア人、カザフ人などとともに飢饉の犠牲者となっていた[6]。

【第二次世界大戦】

第二次世界大戦期の問題については、第4章以下で改めて詳しく扱う。ここでは、とりあえず概略を述べておくことにしたい。

第二次世界大戦の開戦時においても、なお東部地域ではソ連の弾圧や農業集団化による住民の動揺が続いていた[7]。39年9月、独ソ不可侵条約の密約により、ソ連がポーランド東部を軍事制圧した結果、ポーランドに編入されていた西ベラルーシはベラルーシ共和国に併合された。併合を正当化するために住民投票が実施されたが、この投票では再併合を支持する代表者が治安機関によって厳格に選ばれ、あえて反対票を投じるような市民は即座に逮捕された。ソ連の他の地域への自由な移動を妨げるため警察の非常線が張られる一方、大勢の国外追放が何か月にもわたって行われた。

1941年、ベラルーシはドイツ軍のバルバロッサ計画によるソ連侵攻の最初の攻撃を受け、その後3年にわたるドイツ占領地域オストラント全権区で最大の大きさを占めることになった。占領地域ではユダヤ人のゲットーが約200作られ、その地その地で「最終解決」が行われた。

ドイツ軍に対しては人びとの激しい抵抗運動が展開された。ベラルーシ各地の森を舞台とする地下抵抗運動はとりわけ強力だった。ドイツ軍は抵抗運動によって前線との連絡線がたたれる恐れから、パルチザンに対して徹底し

た報復を行った。たとえばカティン Khatin という村に対する報復がある。戦後ソ連当局はソ連軍が 1940 年に行ったポーランド軍将校や知識人の大量虐殺の場のカチン Katyń の森との混同を期待して、名前が似たこのカティンを選び、ドイツの蛮行を非難する国立戦争記念碑を建てた[8]。

ソ連によるベラルーシの再占拠は 1944 年 1 月から 7 月にかけて行われた。ソ連政府は当初から独ソ不可侵条約による 1939 年 9 月の国境が復活されると考え、1939 年から 1941 年に始めたソ連化を完成させるべくできうる限りの試みを実行し、あらゆる反対を押さえ込むために住民の追放や連行も行った。

第二次世界大戦でのベラルーシの人的損失は通常ソ連の統計のなかに組み込まれているため、明確ではない。ソ連の統計はほとんど個々の共和国について言及することはなかったし、異なる民族やスターリン主義者とナチによる犠牲者を区別することもなかったのである。推定されるところではベラルーシの民間人の死者はおおよそ 200 万人にのぼった。全住民に占めた死者の割合はおよそ 25%（三分の一とも言われる）で、ソ連平均をかなり上回り、ウクライナでの死者の割合とほぼ同じであった[9]。いずれにせよ、ベラルーシは第二次世界大戦時に犠牲者を最も多く出した土地の一つであるといえよう。

【戦後期、独立まで】

ベラルーシ共和国はソ連邦の一構成共和国に過ぎなかったにもかかわらず、国際連合設立のためのサンフランシスコ会議によって、国際連合の一員となった。しかし、国連の中で彼ら自らの主権を発揮することはできなかった。戦争による過酷な打撃を受けながら、戦後はめざましい経済復興をとげ、急速に都市化・工業化が進展した。政治的には、社会主義大国ソ連に対する帰属意識は強固なままであった。与党共産党はモスクワの支配下にあり、民族感

情は奪われた。国家宗教たるロシア正教を含む宗教的、文化的生活は、完全に政治に従属した。

ソ連に対する帰属意識の強さを示す例えとして、ソ連時代の 1986 年に起きたチョルノービリ（チェルノブイリ）原発事故をめぐって語られた一つのエピソードがある。放射能汚染レベルにより「移住義務地域」とされた汚染面積はベラルーシがウクライナやロシアよりも広く、国土の 22％が汚染地域となった[10]。原発事故の悲劇を揶揄の対象のように使うことは許されないことであるが、次に紹介する例が「笑い話」のように引かれているのを読んだことがある。

チョルノービリはウクライナのベラルーシとの国境近くにある。原子力発電所の事故直後、そこから放射性物質が飛散していったが、その放射能がモスクワに近づく前に人工雨を降らせることが緊急課題となり、ベラルーシはモスクワまでに放射能を含む雲が広がらないように、自国の上空で雨を降らせるように自ら申し出たというのである。まことしやかにささやかれたこの話は全くたちの悪い「冗談」であろうが、ベラルーシの極端な親ソ的立場を示すエピソードとしてひきあいに出されていた。今日のルカシェンコ大統領の動きを見る度にこのことを思い出す。

【独立後のベラルーシとルカシェンコ】

1991 年ウクライナはソ連崩壊により独立国家としての道を進むことになったが、同じく独立したベラルーシの方は盟主ロシアとの再統合をめざす急先鋒となった。ロシアにも組織が残っていない KGB（旧ソ連の政治警察）も、旧ロシア構成共和国の内ベラルーシにおいてのみ名称ともども組織もなお機能している。反ナショナリズム／親ロシア主義の旗手であったルカシェンコ

は 94 年に大統領に就任すると、自らの政権基盤を強化することを最優先し、大統領権限を強化する憲法改定を強行し、「欧州最後の独裁者」の異名で呼ばれるようになった。ただし親ロシアといっても時としてロシアとのトラブルも起こるようになった[11]。またアメリカ合衆国との関係も悪化し、同じく EU との関係も悪化した。2014 年のウクライナ危機以降、ベラルーシの国民の間では安定を求めロシアを盟主とする地域秩序を支持する動きが再び強まり、EU については懐疑的な意識が深まった。同時に民主化を求める市民運動は過酷な弾圧にさらされ続け、政治的亡命者や出国する若者が増加した。

2021 年 5 月、反政府派ジャーナリストの乗った飛行機をベラルーシ上空から強制着陸させ、逮捕するなどの国際法を全く遵守しない行為があったとして、EU はベラルーシに経済制裁を課した。これに対し、ルカシェンコはイラクにチャーター便を送り、「EU へ行くことができる」と偽って、何千人という中東・アジア・アフリカからの移民希望者・難民を募ってベラルーシに運び、ポーランドとの国境に放置し、野ざらし状態にした。生身の人間を EU に対する「武器」として利用しようしたのである。ルカシェンコによるこうした非人道的政策はまだ続いている。移民希望者たちはポーランドにも入れず、ベラルーシに戻ろうとしても軍に押し返される。中にはどうにかポーランドの森に逃げ込んだものの、低体温症で死者も出るような状態になっている。このように移民・難民の命をもてあそんで、EU に「仕返し」をしようとするのがルカシェンコである[12]。

第４章　第二次世界大戦：ブレスト要塞の戦いからパルチザンの戦いへ

【ブレスト要塞記念碑】

2004 年の旅行で見学した数多くの巨大規模の戦争記念碑の中で最も印象的であったのが、ブレスト要塞記念碑群である。ブレスト要塞は 19 世紀初期にロシア帝国によって星形要塞都市として建設され、独ソ戦開始の際（1941 年 6 月 22 日）、最初にドイツ軍に攻撃された。ベラルーシはドイツの中部方面軍がモスクワへ進撃する際の進路にあたり、ドイツ軍の急襲に対して要塞の守備隊は激しく抵抗したものの、1 週間あまりで陥落した。このブレスト要塞攻防戦は独ソ戦の中での最も重要な戦いの一つであったが、スターリン存命中は顕彰されることなく、スターリン批判後の 1965 年になって大戦時にドイツ軍に激しく抵抗した要塞に贈られる英雄要塞の名誉称号がソ連政府によって与えられた。また将兵たち各部署の責任者もスターリン死後に叙勲された。要塞陥落に際してドイツ軍により処刑されたある共産主義者のユダヤ人軍人は 1957 年レーニン勲章を授与され、また最後まで指揮をとり続けた軍人には 1965 年ソ連邦英雄称号が授与された。そして記念碑群も作られたのである。

この地での記念碑群の建設は、ソ連時代に行われた「大祖国戦争」の記憶政策の一環と思われる。戦闘で徹底的に破壊された広大な敷地をもつ要塞の土台の上に建てられた戦争犠牲者を悼む慰霊碑群や、戦勝を記念する巨大な建造物が並んでいる[13]。

なかでも巨大なコンクリートの兵士像は「勇気」と名付けられたソ連軍兵士の頭部である（図③）。1971 年に建てられたもので、高さ 30 メートル、幅 53 メートルという超巨大な建造物である。ブレスト要塞の廃墟の上で、うつ伏せの姿勢で、ギラギラした目つきで懸命に顔をあげている兵士の姿である。

その表情は周囲を圧倒する。倒れゆく兵士像ともみられるが、正面から見ると、不屈の表情をした兵士が旗をもって戦いに立ち向かおうとしている姿に見えた。しかしインターネット上の解説によれば、ブレストの要塞を守ろうとした末にその廃墟をみつめて悲しみにくれるソ連兵で、手前にある「永遠の炎」は要塞を守るために闘った兵士・市民・子どもを追悼するものだという。他のやや型にはまった旧ソ連の戦勝記念碑や彫像とは異なった自由な様式で、扇情的でもあり、感情に直接訴えかけてくる。

ベラルーシとロシア合作の『ブレスト要塞大攻防戦』という映画がある。この映画は、その監督・脚本家によれば、二つのスラヴ民族国家の一体性の証しを訴えるものであるというが、2010 年 6 月 22 日には、巨大な兵士像の

図③ 「勇気」の像
筆者撮影。

前にルカシェンコ大統領とロシアのメドヴェージェフ大統領（当時）の二人が立ち、完成記念式典が執り行われた。

この作品はいわゆる戦争映画で、ハラハラするような戦闘場面が続くが、砦の内側の壁に何か鋭利な金属で引っ掻いて書かれたスローガン「我死すとも降伏せず。さらば祖国よ」（ブレスト砦博物館蔵）[14] が映し出される印象的な場面がある。観る者の愛国心をかきたてるつくりとなっている。

【パルチザン戦争】

独ソ戦開始後、すぐにパルチザン戦争が始まった。圧倒的な力をもったドイツ軍に対しコラボレーター（協力者）の立場にたつ人間も少なくなかった。しかし、ドイツによるベラルーシ人、ウクライナ人、ロシア人、ポーランド人、ユダヤ人（特にユダヤ人に対しては占領の初期からすぐに行動部隊が虐殺を開始した）に対する苛酷な支配が始まると、家族を殺害されたり、死に直面したりした多くの人びとが抵抗闘争にかきたてられたのである[15]（図④）。ドイツ軍の侵攻後、赤軍は急遽退却したが、多くの兵士たちが取り残され、中には森に逃げ込んだ兵士もいた。ドイツ軍の捕虜となったソ連兵の内、逃げ出すのに成功した者もベラルーシの森に身を潜めた。森に潜伏したこれらの人びとはパルチザンと称して、小集団を形成し農村地帯を放浪した。彼らは無規律状態でリーダーもなく、武器を持たず、わずかな資源をめぐって、対立や暴力、殺人さえおかすこともあった。43 年末にソ連から特殊パルチザン組織員が到着するなどして、ようやく無秩序状態がおわった。

ベラルーシは森と沼沢地が多く、パルチザン戦争を行うには、格好の場所であった。パルチザンの激しい抵抗運動に対して、ナチは報復のために 600 以上の村を焼き払った。ベラルーシには、焼かれて失われた村の記念碑が今

図④　ドイツ兵を射殺したというプラカードを下げさせられ、処刑前にミンスクの町をひきまわされるパルチザンの男女

出典）United States Holocaust Memorial Museum, *Holocaust Encyclopedia*. https://encyclopedia.ushmm.org/content/en/article/minsk（2023 年 11 月 17 日アクセス）

もあちこちに残されている[16]。森の中の 3 年間の戦争だった。その間に住民の置かれた状況については、スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチの『ボタン穴から見た戦争　白ロシアの子供たちの証言』、『戦争は女の顔をしていない』に、パルチザンに加わった女性たちの証言をはじめとする人びとの貴重な証言が収められている。

私たちの旅行では小学校校舎（コロドック）の一角にあるパルチザンの闘いの展示室を見学した。元パルチザンの女性がパルチザン闘争の概要を説明してくれたが、残念ながら彼女の説明がよくわからず、展示を見るのみであった。パルチザンに参加した人たちの写真や、ソ連軍やソ連国民がいかに戦っ

たかという戦意高揚のポスター、戦闘の写真などが展示されていた。その背景には赤い紙がたくさん張られ、プロパガンダ的な色彩が濃いものの、ある意味でわかりやすい展示であった。説明役の元パルチザンは、若い時にはさぞ美しかったと思われる魅力的な女性だった。活動の最初には誤りもあったという発言には興味を引かれたが、肝心なことは分らず、かえすがえす残念だった。おそらく前述した無規律状態のなかでのパルチザン部隊のことなどを指していたのであろう。

パルチザン戦闘要員のための食料・物品調達が武器調達同様困難であったことは容易に想像でき、実際のところ、その問題にどう対処していったかに、私は関心をいだいた。パルチザンの闘いは、彼らの本拠地のまわりに住む住民にとっても非常に危険なことではなかったか。村人は、昼間はドイツ軍や敵側についた警察官が怖かったし、夜はパルチザンがくるのが怖かった。パルチザンやドイツ兵からの略奪や、彼ら村人のなかからの密告もあったし、助けてくれた村人がそのためドイツ軍に虐殺されることもしばしば起こっていた[(17)]。パルチザンとその戦いを支えた村人たちとの過酷な関係をどうとらえればよいか考えていたものの、それについて触れることはパルチザンで戦った人たちを冒涜するようなものであると思え、どうしても質問できなかった。

【パルチザンとユダヤ人】

約 50 万人のユダヤ人がソ連軍兵士として戦争で戦ったが、パルチザングループの中でのユダヤ人の割合は遙かに少ない。公式のソ連の統計によると 37 万人と見積もられたパルチザンのうち、ユダヤ人はせいぜい 3 万人だった。ユダヤ人はドイツのスパイではないかとして、ロシアの、とくにウクライナのパルチザングループに拒絶されたためである。ユダヤ人パルチザンの内三

分の一がウクライナで活動したのに対し、彼らの半数はユダヤ人人口がはるかに少ないベラルーシで活動した（図⑤）。初期のパルチザンはゲットーから逃げてきたユダヤ人を敵として襲ったことさえあった。ユダヤ人に援助を与えたのは少数派であった。

ベラルーシにはウクライナに比べ森の潜伏場所が多くあり、相対的に戦いやすかったが、多くのユダヤ人パルチザンはもっぱら爆弾の仕掛けに従事するようになり、「鉄道戦争」といわれる鉄道、橋の爆破作業などを行った[18]。

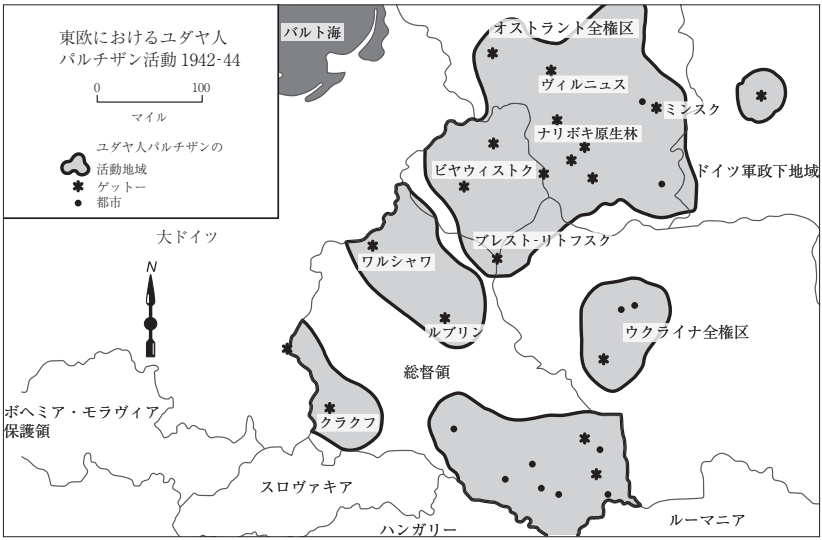
ユダヤ人のなかには非ユダヤ人パルチザンとともに戦う者もいたが、自分たちの集団を形成し、家族キャンプのようなものになったケースもある。そのような集団の一つがビエルスキ隊であった。ビエルスキ隊はベラルーシのパルチザンの中で最も重要な部隊で、最終的には 1,200 名を超える大きな集団（7 割以上が女性、老人、子供）となった。ビエルスキというユダヤ人兄弟の名を冠したこの部隊は、ソ連のパルチザンとしばしば組んで、ドイツの警備兵と施設に対する作戦を行い、多くのドイツ人とベラルーシのコラボレーターを殺害した[19]。

1944 年 6 月、ソ連軍が西ベラルーシに大攻勢をかけると、敗色が濃くなったドイツ軍は撤退し、ベラルーシ全域が解放された。それから 40 年以上たって社会学者ネハマ・テックによりビエルスキ隊の生存者や彼らを詳しく知っていたロシア人パルチザンのメンバーのインタヴューや調査が行われ、彼らの戦いの記録がまとめられた[20]。

ビエルスキ隊はゲットーに潜入し、ユダヤ人の逃亡を助けて仲間に入れたり、ソ連のパルチザンと協力して戦ったりした。彼らは永続的な宿営地を作り、そこに工場や仕事場、学校、病院などを建て、東欧のユダヤ人村（シュテートル）のような構造ができた。ユダヤ人の抵抗には生き抜くための戦い

と復讐のための戦いがあったが、ビエルスキは前者を最優先した。テックは、ビエルスキ隊の活動を明らかにすることにより、ナチの圧政のもと、ヨーロッパ系ユダヤ人は死を甘んじて受け入れただけだったという人びとのイメージを正すこと、自らの命を危険にさらしつつも仲間を助け、戦ったユダヤ人がいることを伝えることを著書執筆の目的としたという。

非ユダヤ人の地下グループは物資の援助や抵抗や保護のために地域住民の助けをあてにできたが、ユダヤ人の抵抗者はそれを期待できなかった。ミン



図⑤　ユダヤ人パルチザン活動地図

出典）United States Holocaust Memorial Museum, *Holocaust Encyclopedia* 所収地図を筆者加工。
https://encyclopedia.ushmm.org/content/en/map/jewish-partisan-activity-in-eastern-europe-1942-1944（2023 年 11 月 13 日アクセス）

注）大ドイツとは 1943 年以降のドイツの公式の国名。

スクなどいくつかの地区ではゲットー内でユダヤ人の「自治」のためにつくらせたユダヤ人評議会の支持があったが、そもそも抵抗運動の指導者は経験が少なく、ユダヤ人自身が政治的にバラバラで孤立し、復讐を優先し、仲間の死期を早めることもあった。そうしたなかでビエルスキ部隊は、さまざまな問題があろうとも仲間を守り抜こう、生き残ろうとし、成功した稀有な例であったという。

ビエルスキ兄弟の戦いの記録は映画化されたが（邦題『ディファイアンス』）、ベラルーシでの映画撮影は難しく、リトアニアのヴィルニュスで撮影されたという。あの明るい森にどうやって大きな宿営地ができたのだろうという好奇心もあり映画を観に行ったが、私が旅行中に見た森とは大分ちがい、彼らの宿営地はミンスクから南の針葉樹林の多い、「黒い森」ともいわれるナリボキ原生林だった。彼らが長期にわたってキャンプ生活を送れたのはそのような深い森があったためだろう。

映画はテックの書を原作としてはいるが、あくまでも彼らの戦いを英雄的に描くハリウッド映画である。日々生死の境にあった劣悪な環境の中に生きる人びとの集団生活の現実は、この映画でも描かれているものの、原作の方がはるかに人間くさく、なまなましい[21]。

次に、このビエルスキ・パルチザン以外のパルチザン活動について、スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチの証言文学集と、ユダヤ人でドイツ軍の通訳となりその中でユダヤ人を逃がすという活動を行ったダニエル神父を取り上げて、紹介することにしたい。

【スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ】

スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチはベラルーシ人を父とし、ベラルー

シ育ちのウクライナ人を母として、1948 年ウクライナ共和国に生まれた。生後まもなくミンスクに移住し、ベラルーシ国立大学を卒業した。彼女は女性パルチザン、ソ連軍女性兵士や占領下の女性たち 500 人を超える人びとから証言を集め、戦時下の生活を描き出したドキュメンタリー作品を発表し[22]、ノーベル文学賞を授与された[23]。

彼女の著書『戦争は女の顔をしていない』は、彼女が 1978 年から集め始めた女性たちの証言からなり、ペレストロイカが開始された 85 年に刊行された。彼女が聞き取りをはじめた段階では本当の戦争の凄惨さを語ることを避けた女性たちも多く、また聞いたことをすべては書くことはできなかったという。スターリンは戦中から「ソ連の兵士は降伏しない。捕虜はいない。いるとしたら裏切り者だ」と公言していたため、捕虜になるよりも死を選んだ兵士たちもいた。ドイツ軍の戦争捕虜になった人びとも戦後、国賊の扱いを受けて極寒の収容所に送られるなどした。捕虜となり生き延びた人たちの名誉が回復され釈放されたのは、フルシチョフのスターリン批判以降だったのである[24]。

女性パルチザンは看護師、連絡・通信員、斥候などの任務に就いた他、戦闘にも直接加わった。ベラルーシの例かどうかわからないが、アレクシエーヴィチがかつての女性パルチザンから聞いた証言を一つだけあげておきたい。

その女性がパルチザン部隊に入ったために、彼女の母親はゲシュタポに逮捕されてしまい、2 年間、ドイツ軍の軍事作戦の際に他の村の女性たちと一緒に行軍する兵士たちの先頭を歩かせられた。地雷が仕掛けられている可能性から母親たちを人間の盾にしていたのである。パルチザンの娘は、指揮官の命令があると、母親がいても命令に従いその方向に撃ったという。母親は、ドイツ軍が退却の際に銃殺された。その女性は、村人たちがドイツ軍にいた

ぶられて残忍に殺害されていった光景を、死にまつわる臭いとともに記憶し、生涯それに苦しみながら生きてきたと、アレクシエーヴィチに語っている[25]。

【ダニエル神父】

ダニエル神父というのはカトリックに改宗後の名前である。彼の本名はオスヴァルト・ルフェイセンといい、ジヴィエツ（ポーランド）のユダヤ人家庭で 1922 年に生まれた[26]。ベラルーシでパルチザンに協力し、またユダヤ人を助けた彼は、密告されて逮捕されたが、処刑直前に脱出し、修道院にかくまわれた。そこでキリスト教の教えに接し、カトリックに改宗して、神父となった。カトリックのユダヤ人として戦後イスラエルに移住しようしたが、キリスト教徒はユダヤ人ではないとして、イスラエル政府から認められなかった。後にこの問題はイスラエル帰還法の改定につながった[27]。

彼については、その生涯をもとにして書かれた『通訳ダニエル・シュタイン　上・下』（邦題）という小説がある。母語のポーランド語の他、ベラルーシ語、ロシア語、ドイツ語などが話せた彼は、ナチス・ドイツによるユダヤ人迫害が激しくなると、ベラルーシのミールへ逃げ、そこで、父親がドイツ人で、母親がポーランド人といつわり、ドイツ占領軍、ゲシュタポや地元警察の通訳として働くようになった。完璧なドイツ語が話せたからである。彼は通訳として得たユダヤ人殲滅作戦についての情報をゲットーのユダヤ人に伝えたり、パルチザンを逃がしたり、また警察署から盗んだ武器をパルチザンに渡したりした。彼はミール城の廃墟をゲットーにした収容所から処刑前のユダヤ人 300 人逃亡させたが、自身もユダヤ人と知られてしまったため、逃亡した[28]。

この小説ではパルチザンとしての彼の気持ちが次のように述べられている。

小説での語りではあるが、パルチザンの性格をよくついているので、紹介しておこう。

> 結局私は 1943 年 12 月から、赤軍がベラルーシを解放する 1944 年 8 月までの十か月をパルチザンたちのところで過ごしました。あれから長い歳月が過ぎた今だからいえるのですが、ドイツ軍で働いていた時は、人びとを助け、可能な限り人命を救助するという任務が自分にあることがわかっていました。森の中でパルチザンたちと一緒にいた時は、もっと複雑だったのです。部隊での生活は過酷でした。私が加わった時、部隊にはロシア人、ウクライナ人、ベラルーシ人、それからユダヤ人も何名かいました。その頃、ポーランド人はもう部隊にはいませんでした。ポーランド人の一部は脱走し、残った者たちはロシア人に銃殺されました。…パルチザンというのは、英雄と強盗の中間のような存在でした。私たちは生きるために食料を手にいれなければなりませんでしたが、それは地元の農民からの食料を手に入れるしかありませんでした。農民たちはドイツ人に強奪され、そしてパルチザンにも強奪されました。…私たちは最後に残った一頭の牛や馬を奪うこともありました。…部隊の女性の置かれた状況は、私をひどく悲しませました。…男たちから性的関係を強要され、彼女たちはそれに逆らうことができなかったのです。…私は女性たちをとても可哀そうに思いました。(29)

パルチザンがかかえる苦悩の問題について彼の語りは重く、またパルチザンの女性の苦しみは小説『ディファイアンス』にでてくる女性たちの姿と重なっている。

第５章　ユダヤ人大量虐殺

【ベラルーシにおけるユダヤ人の歴史】

前述したようにパルチザンに加わったユダヤ人も存在したものの、ベラルーシのユダヤ人の圧倒的多数は第二次世界大戦期に虐殺の対象となった。虐殺の様相に触れる前にまずユダヤ人の歴史について簡単に見ておこう。

ベラルーシのユダヤ人の歴史は一四世紀に遡る。当時のベラルーシの支配者リトアニア大公は、ユダヤ教団に一定の特権と自由を認可し、彼らは国家の社会・経済活動に積極的に参加していた。18 世紀末にこの国家が三度の分割（ポーランド分割）を受けたのち、ベラルーシのユダヤ人はロシア帝国の主権下に入った。本稿の初めに紹介したように 19 世紀末にはベラルーシのユダヤ人は人口の 14％を占め、ユダヤ人が最も稠密な地域としてディアスポラでの最大のユダヤ教団の一つであり、当時のユダヤ人の文化・精神生活の中心であったと考えられている[30]。しかしロシア帝国全体では反ユダヤ主義が国家政策となっており、ベラルーシでも彼らは迫害の対象となっていた。とはいえ 1881 年にウクライナで発生した「ポグロム」はベラルーシではまれであった。これはベラルーシの農民の間で宗教的、民族的なユダヤ人憎悪やナショナリズムがほとんどみられなかったためであると、高尾千津子氏は指摘している[31]。

ベラルーシからのユダヤ人の移住もみられた。人口増加に伴い帝政期を通して、彼らは現ベラルーシ等の「定住地域」からウクライナ、オデッサを中心とする黒海沿岸に移住した。さらに 19 世紀から 20 世紀にかけてはアメリカ合衆国とパレスチナが移住先の中心となった。ミンスクではシオニズム運動が盛んであったが、彼らシオニストたちも出国していった。イスラエルの

ハイム・ヴァイツマン（初代大統領）、シモン・ペレス（大統領、首相、ノーベル賞受賞者）、メナヘム・ベギン（首相）、イツハク・シャミル（首相）などの著名な政治家は、いずれもベラルーシに出自を有する。ロシア革命後のベラルーシ共和国では、共産主義者のイデオロギーのもとユダヤ人同化政策が進められたし、イディッシュ語、ロシア語、ポーランド語、ベラルーシ語が公用語となっていたことに示されるようにユダヤ人とベラルーシ人の平和的な共存も、実際にみられた。しかしその時期にも多くの移民が出たのは、やはり他の人びととの文化的乖離があったことを示すといえよう[32]。

ちなみに、第二次世界大戦前夜の 1939 年の統計によれば、人口 23 万 9,000 人の都市に成長したミンスクで、ベラルーシ人は 12 万 4,000 人、ユダヤ人は 7 万 1,000 人となった。19 世紀末にミンスクの人口の半数がユダヤ人であったことを考えると、統計の仕方が変わったこともあるが、ミンスクはユダヤ人の街からベラルーシ人の街へと大きく変化したのである[33]。そのユダヤ人たちが、第二次世界大戦期には虐殺の対象にされていった。

【ユダヤ人虐殺】

1941 年 6 月 22 日の独ソ戦勃発から 4 日後の 25 日にミンスクが陥落して、8 月末までには全ベラルーシがドイツ占領下に置かれた。ドイツ軍の進撃があまりに早かったため、東に逃げようとしたユダヤ人たちは逃げ切れなかった。またその頃はヒトラーのユダヤ人政策の苛酷さに対する情報も行き渡っていなかった。そのため 80 万人以上のユダヤ人が取り残されたのである。

7 月からミンスクのユダヤ人知識人層の殺害が開始された。先に触れたように、ベラルーシ各地に約 200 のゲットーがつくられた[34]。ユダヤ人たちはゲットーに押し込められ、飢えと寒さで死んでいった。さらに、虐待、重労

働、処刑などによって大量殺戮政策が実行されていった。またミンスクには大ドイツ、ボヘミア・モラヴィア保護領、ポーランド、フランス、オランダ、ベルギー他から 5 万 5,000 人のユダヤ人が送られてきた。そしてそこが彼らの最終地点となった[35]。

ベラルーシではユダヤ人は 42 年初頭までにその半数が殺され、44 年 8 月までに 56 万人がホロコーストの犠牲となったといわれる。独ソ戦開始後の占領地では絶滅収容所への大規模移送は行われず、殺害はほとんど現地で執行された。ユダヤ人たちの多くはベラルーシに多くある窪地で殺害され、そこに遺体が埋められたのである（図⑥）。殺害されたのはベラルーシのユダヤ人

図⑥　窪地に立つユダヤ人大量虐殺の慰霊碑（1947 年建造）と窪地へ下る犠牲者たちの像（2000 年制作）筆者撮影。

以外、主にドイツ・ユダヤ人とロシア・ユダヤ人だった[36]。

ミンスク市内には、5,000 人近くの大量虐殺が行われた窪地がある。そこには 1947 年に慰霊碑が建てられたが、さらに 2000 年になって、虐殺の場へ送りこまれるユダヤ人の群像が、慰霊碑に向かい合う形で階段にそって作られた。これは、殺害されるために窪地に下っていく老若男女の犠牲者たちの苦悩と絶望を表わし、惨劇を感情に直接訴える形で伝えようとした新しいタイプの記念像である。

第 6 章　2004 年の旅　再び

【印象的な話】

断片的ながら、第二次世界大戦期を中心にベラルーシの歴史をたどってきた後で、私の旅に再び話を戻したい。

旅行参加者の中に、ベラルーシで戦病死した父親のお墓参りがしたいというパン屋の夫妻がいた。その希望で少し寄り道をして、住所を頼りにかつての軍の病院跡にむかった時のことも思い出す。ずいぶん探した末、病院のみならず隣接していた墓地もなくなっていたことがわかった。そこには大きなアパートが建てられていた。病院と墓地の古い写真を大切に持ってようやくお墓参りに来たにもかかわらず、両方ともすっかりなくなっていた。おそらくアパートの下に埋められてしまったと思われた。夫妻はお墓に手向けるために大きな花束を用意していたが、近くの公園の巨木の根元にその花束を置いて祈っていた。その地は広々とした場所で、少しでも何か残っていればと思いつつ、バスの中で待っていた私たちは夫婦の気持ちをおしはかる他なかった。

ある小規模の強制収容所のすぐ近くに住んでいたという地元の農婦の話も

思い出す。彼女の説明によると、夫は強制収容所で働かされ、彼女も強制収容所でまかない仕事のジャガイモむきなどをさせられた。農家の庭にはガチョウが飼われていたが、大勢のユダヤ人を射殺する前に兵士がガチョウをおいたてて、ガアガア鳴かせていたという。犠牲者たちの悲鳴が住民に聞こえないようにしたのだ。ランズマン『ショア』（フランス、1985 年）の映画で証言者が話していたとおりだった。私たちが訪れた時、その農家の周辺には鳥の鳴き声の他に音が出るものは何もなく、経験したことのないような静寂と美しい自然が広がっていた。初めて経験したような全く何も音がしないと感じさせる静けさだった。そうした広い空の下で虐殺された犠牲者の姿を思い起こしたのである。

ドイツへ強制連行され農場で働かされた人びとの体験談も印象に残った。私たちには強制連行の被害者団体の女性会長から話を聞く機会が設けられていた。それが強制労働従事者だったとは思えない 60 代はじめとおぼしき女性だったので、やや驚いた。幼児の時に強制連行で母親とともにドイツに連れて行かれたという女性で、若い人を代表者にということにより、彼女が選ばれたそうだ。連行される際、幼い彼女を抱いた母親はとても小柄で、徒歩でのドイツ行きについていけず、集団から遅れはじめ、死を覚悟したという。その時移送を担当していたドイツ兵の一人が幼い彼女を抱いていってくれた。その兵士が彼女を抱き上げた時、足手まといだとして娘が殺されるのではないかという恐怖に母親は陥ったが、兵士は甘い物をくれ、自分の武器の位置をかえ、微笑みながら抱いて連れて行ってくれた。その兵士はやや年配で、重装備で行軍しており、その上子供を抱いて歩くということは、肉体的負担となる。それでもそのような人間性を示した兵士がいたのである。またその母親が働いたドイツの農家が、幼い彼女のことを大変かわいがってくれたこ

と、彼女たちが解放される際に養子にという話もでたという。もちろん、このようなことがあったとしても、ドイツが加害者であることには変りがないが、個人レベルでは加害者と被害者との間にさまざまな位相が存在したことを、こうした話は改めて教えてくれた。彼女は「和解の旅」でベラルーシにやってきたドイツ人たちへの友好関係を示そうとして、この体験を話してくれたのかもしれない。

彼らは帰郷後、西側帰りとしてスターリン体制のもとで迫害を受けるのを恐れ、ドイツで働いていたということは決して言わなかった。1991 年のドイツ＝ベラルーシ和解基金設立によってようやくドイツによる強制労働への補償が実現したが[37]、その時には該当者がすでに亡くなったか、老齢のため交渉する力がない人びとも多かった。そのため 2 歳半でドイツから戻った一番若い被強制連行者の彼女が代表者となったのである。この補償は個々人に対してなされるのではなく、集団に対して行われ、それを当事者たちに運用してもらうという方式になっているということだった。

ベラルーシ旅行から戻ってしばらくして、私はキンダートランスポートという戦争が始まる直前に行われたイギリス市民によるユダヤ人の子どもの救出運動でイギリスに渡り、戦後ドイツ（東）に戻ったベルリン在住の人びとへのインタヴューを始めた。彼らの親たちのほとんどは出国できず、ベルリンに残った親たちの多くはミンスクに送られ殺害された。筆者がインタヴューした「子ども」11 名のうち、3 名の親や親族がミンスクに送られ殺害されているということも知った。

短い旅ではあったものの、この旅でベラルーシという国での戦争の現場の一端に触れることができた。また以前から関心があったダニエル神父と関わりのあるミール城も見学できた。さらに参加者からもいろいろな話がきけて、

充実した旅だった。この旅行にもう一度参加したいと思っている内に 20 年もたってしまった。そうした中、現在のウクライナ戦争の状況とそれへのベラルーシの関わり方を注視しつつ、暗い気持ちを抱く日が続いている。

註

(1) 2020 年度の旅行日程と概要は、Damerow, „Studienreise nach Brest-Minsk-Vitebsk-Bobrujsk“ 参照。

(2) シェフチェンコ「ロシアの新しい歴史教科書」。ただしこの「三位一体論」には近年議論がある。塩川伸明氏によれば、今日優勢な言説は「ウクライナとロシア（ベラルーシ）はもともと一体だったということを強調」しているが、それぞれ明確なる民族であり、歴史を通じてロシアが支配的立場にたっていた。塩川「ウクライナ戦争をめぐって」。

(3) 以下、ベラルーシ史の概説については、服部他（編）『ベラルーシを知るための 50 章』に拠るところが多い。特に典拠を示す必要がある場合のみ注記した。

(4) 筆者はベラルーシで正教の教会に初めて入ったが、カトリックの教会などと違ってベンチがないということに気がついた。壁にそって、老人や障害をもつ信者用にベンチが設けられているが、その他の信者は立ったまま礼拝を行うのである。祈りの場として厳しい雰囲気が漂っていた。

(5) Davies, “Belorussia”, 122.

(6) 塩川「ウクライナ戦争をめぐって」。

(7) Davies, “Belorussia”, 122.

(8) Davies, “Khatin”, 650；早坂『ベラルーシ』368-370 頁参照。

(9) Davies, “Belorussia”, 123.

(10) 服部他（編）『ベラルーシを知るための 50 章』268 頁。

(11) BS 世界のドキュメンタリー『ベラルーシ』。

(12) BS 世界のドキュメンタリー『ベラルーシ』。

(13) いわゆる社会主義リアリズム的巨大彫像やオベリスク、肖像写真がついた記念碑に、あざやかな色のプラスチック製の花輪が数多くかざられていた。

(14) 参考文献リスト〈映像資料・映画〉の「ブレスト砦の壁のスクラッチ」参照。

(15) ラカー（編）『ホロコースト大事典』520、522 頁。

(16) 沼野『アレクシエーヴィチ　戦争は女の顔をしていない』16 頁；アレクシエー

ヴィチ『ボタン穴から見た戦争』342 頁。

(17)　アレクシエーヴィチ『ボタン穴から見た戦争』56、67-71 頁；同『戦争は女の顔をしていない』34 頁。

(18)　ラカー（編）『ホロコースト大事典』452、522-523、653 頁。

(19)　United States Holocaust Memorial Museum, “The Bielski Partisans”.

(20)　テック『ディファイアンス』；この邦訳は後述する日本での映画公開とともに出版された。

(21)　テック『ディファイアンス』たとえば 219-226、261 頁；ラカー（編）『ホロコースト大事典』452 頁。

(22)　アレクシエーヴィチ『ボタン穴から見た戦争』；同『戦争は女の顔をしていない』。

(23)　ベラルーシでは 2020 年 8 月の大統領選挙の不正疑惑をめぐり、選挙後ルカシェンコ大統領の退陣を求める抗議デモが続いた。抗議する者が逮捕されたり国外退去を強いられたりし、アレクシエーヴィチもドイツに出国した。

(24)　沼野『アレクシエーヴィチ』64-65、70 頁。

(25)　アレクシエーヴィチ『戦争は女の顔をしていない』373-377 頁。

(26)　ウリツカヤ『通訳ダニエル・シュタイン』上、52 頁。

(27)　臼杵『イスラエル』104 頁。

(28)　*Die Verfolgung und Ermordung der europäischen Juden*, Band 8, Dok.8/154.

(29)　ウリツカヤ『通訳ダニエル・シュタイン』上、134、136、227-238 頁；下、57-61 頁、251 頁。

(30)　ラカー（編）『ホロコースト大事典』519 頁。

(31)　服部他（編）『ベラルーシを知るための 50 章』61-62 頁。

(32)　服部他（編）『ベラルーシを知るための 50 章』62-63 頁。

(33)　野村「ミンスクのホロコースト」前篇、7-8 頁。

(34)　野村「ミンスクのホロコースト」前篇、13 頁；ラカー（編）『ホロコースト大事典』519-520 頁。

(35)　ラカー（編）『ホロコースト大事典』523-524 頁；服部他（編）『ベラルーシを知るための 50 章』60-61 頁。

(36)　ラカー（編）『ホロコースト大事典』521 頁；服部他（編）『ベラルーシを知るための 50 章』64 頁；野村「ミンスクのホロコースト」後篇、9-10、16 頁。

(37)　矢野『ナチス・ドイツの外国人』223-226 頁。

参考文献・資料

アレクシエーヴィチ、スヴェトラーナ『ボタン穴から見た戦争：白ロシアの子供たちの証言』三浦みどり訳（岩波書店、2016 年）

アレクシエーヴィチ、スヴェトラーナ『戦争は女の顔をしていない』三浦みどり訳（岩波現代文庫、2020 年）

臼杵陽『イスラエル』（岩波書店、2009 年）

ウリツカヤ、リュドミラ『通訳ダニエル・シュタイン　上・下』前田和泉訳（新潮社、2009 年）

塩川伸明「ウクライナ戦争をめぐって」（2022 年 3 月 13 日）https://www7b.biglobe.ne.jp/~shiokawa/notes2013-/Ukraine2022.htm（2023 年 11 月 13 日アクセス）

シェフチェンコ、ヴィタリ「ロシアの新しい歴史教科書、ウクライナ侵攻を正当化　人類の文明守るため」BBC News Japan（2023 年 8 月 10 日）https://www.bbc.com/japanese/66457876（2023 年 11 月 13 日アクセス）

沼野恭子『アレクシエーヴィチ『戦争は女の顔をしていない』：声を記録する』（NHK 出版局、2021 年）

野村眞理「ミンスクのホロコースト―ユダヤ人抵抗運動の成果と限界」前篇『金沢大学経済論集』39 巻第 1 号（2018 年）；後篇『金沢大学経済論集』39 巻第 2 号（2019 年）

早坂眞理『ベラルーシ：境界領域の歴史学』（彩流社、2013 年）

服部倫卓／越野剛（編）『ベラルーシを知るための 50 章』（明石書店、2022 年）

テック、ネハマ『ディファイアンス：ヒトラーと闘った 3 兄弟』小松伸子訳（ランダムハウス講談社、2009 年）

矢野久『ナチス・ドイツの外国人：強制労働の社会史』（現代書館、2004 年）

ラカー、ウォルター（編）『ホロコースト大事典』井上・木畑他訳（柏書房、2003 年）

Damerow, Ingrid, „Studienreise nach Brest-Minsk-Vitebsk-Bobrujsk“, http://www.ingrid-damerow.de/index.php/reisen/8-studienreise-nach-brest-minsio-vitebsk-bobrujsk-2（2023 年 11 月 13 日アクセス）

Davies, Norman, “Belorussia”, in : I. C. B. Dear, ed., *The Oxford Companion to the Second World War*, Oxford: Oxford University Press, 1995.

Davies, Norman, “Khatin”, in : Ibid.

United States Holocaust Memorial Museum, “The Bielski Partisans”, *Holocaust Encyclopedia*, https://encyclopedia.ushmm.org/content/en/article/the-bielski-partisans（2023 年 11 月 13 日アクセス）

Die Verfolgung und Ermordung der europäischen Juden durch das nationalsozialistische Deutschland 1933–1945, Band 8: *Sovietunion mit annektierten Gebieten II*: *Generalkommissariat Weißruthenien*

und Reichskommissariat Ukraine. Bearbeitet von Bert Hoppe, Imke Hansen und Martin Holler, Berlin: Oldenbourg, 2016, 366–368, Dok.8/154（„Der Leiter des Gendarmerie-Postens in Mir berichtet am 20. Augst 1942 über Oswald Rufeisen, der die örtlichen Juden vor dem bevorstehenden Massaker gewarnt hatte.“）

〈映像資料・映画〉

BS 世界のドキュメンタリー『ベラルーシ：ウクライナの隣の “独裁政権”』（2022 年、フランス、NHKBS1　2022 年 6 月 30 日放送）

映画『ディファイアンス』（2008 年、アメリカ）監督エドワード・ズウイック

映画『ブレスト要塞大攻防戦』（2010 年、ベラルーシ・ロシア）監督アレクサンドル・コット他

兵士像「勇気」https://www.belarus.by/rel_image/3457（2023 年 11 月 17 日アクセス）

ブレスト砦の壁のスクラッチ「我死すとも降伏せず」https://www.flickr.com/photos/adam_jones/26829116783/in/photostream/（2023 年 11 月 17 日アクセス）